

# イエーナ期ヘーゲルの人倫思想の実像を求めて

## その5 ヘーゲルによるフィヒテ哲学批判の正当性をめぐって

坊 城 明 文\*

### Seeking the True Picture of Hegel's Thought on Ethics in his Jena Period

#### (5) Concerning the Validity of the Criticism of Fichte's Philosophy by Hegel

Akifumi BOJYO

In his early period in Jena, when Hegel began to mould his own philosophy, there lay before him the great philosophical systems of Kant and Fichte. To Hegel's eye the two principles of speculative reason and of reflexive understanding were intertwined in these Transcendental Philosophies. With its full recognition this spirit of speculative reason would have been developed into proper philosophical ripeness. As it was, reflexion got the better of speculation and understanding predominated over reason, with the result that the principle of speculation or absolute identity, conceived in its budding form, was soon lost to sight or passed out of mind in these philosophies.

Under these circumstances Hegel's way of criticism against 'Reflexion Philosophy', as he later named it, consisted first in discriminating the two principles of reflexive understanding and of speculative reason, and then in subordinating the former principle to the latter.

In this paper we will go on to examine how Hegel criticized Fichte's Philosophy and whether his criticism can prove to be a sound one.

フィヒテもヘーゲルも、かれらが哲学の原理として追究した事柄は、基本的には同じものであったといってよい。かれらはいずれも、主観と客観との「絶対的な同一性」を真なるものと考えて、そこに真の無限性、理性、そして自由の根拠を見い出だそうとしたのである。けれども、「絶対的なもの」にせよ、あるいは「自由」や「理性」にせよ、これらは両者において同じ言葉で語られていても、はたして同一の内容として把握されていたかについては、そこには大きな違いがあったと言わなければならない。

その違いは、結局、どちらも「絶対的なもの」を真なるものと捉えるにしても、フィヒテのようにこれを有限な現実(現象)との反省関係に措定された主観的な理念と見るのか、それともヘー

---

\* 教養部

ゲルのように絶対的なものを「思弁的なもの」と見て、これを生ける現在という直観の現実態において把握するののかの違いにあったと見ることができるであろう。そして理念と現実性との把握の仕方における両者の相違は、おのずから、広く自然や社会の認識にも及び、二つの哲学の間に世界像全体に亘る根本的な違いを生み出すに至った。このイエーナの時期、ヘーゲルが行なったフィヒテ批判は、この哲学の原理をなす自我規定の基本的な欠陥を衝くとともに、さらにその原理から由来する自然観および社会哲学の矛盾と破綻を追跡し、描き出したという点で、フィヒテ哲学に対しては決定的ともいえる批判になりえたと思われる。それでは、かれのフィヒテ哲学批判の核心は、どこにあったのであろうか。

問題はやはり、主観と客観とのいわゆる「絶対的な同一性」をどのように理解するかであり、哲学の根本原理としてのこの同一性にどこまで忠実に体系の展開が可能であったのかということであった。われわれは、前稿の叙述を承けて、特に「当為」「努力」「要求」といったフィヒテの実践的概念から派生する自我規定の展開を、まずフィヒテ自身の哲学に則して追ってみることにしよう。そして、その後で、ヘーゲルのフィヒテ哲学批判をかれ自身の「あべこべ」のフィヒテ理解に基づいてなされたとして批判する一解釈の論評を通して、逆にヘーゲルのフィヒテ批判がその悟性的総合の展開の矛盾を見届けた、いかに深く洞察的なものであったかを、考えてみよう。

## 17. 実践的理性の要求と理念の世界

ところで、フィヒテが求めた「絶対的な自我」とは、どのような自我なのであろうか。それは、自我が自己自身によって完全に措定され、実在性の全体が自我に等しいものとして余すところなく実現されている状態、すなわち自我の活動性＝実在性であるとする完全な同一性のことである。

「自我が絶対的である限り、自我は無限であり、無制約的である。存在するすべてを自我は措定し、自我が措定しないものは存在しない。しかし、自我は自らが措定するもののすべてを自我として措定し、またそれをば、自らが措定するすべてとして措定するのである。だからこの点で、自我はすべてを、つまり無限で無制約的な実在性を自らの内に包含している。」<sup>(1)</sup>

断るまでもなく、そもそもフィヒテ哲学にとって、「実在性」(Realität)と自我の「活動性」(Tätigkeit)とは、端的に同じ事柄を意味していた。「自己措定」の活動と「存在」との理性的な同一性、つまり働くものを真の実在と見る思弁的な洞察は、フィヒテ哲学における最も優れた認識であって、このような自己を措定する自我と存在との根源的な同一性について語ったフィヒテの言葉を、われわれは『知識学』の随所に見い出すことができる。

「実在性の概念は、活動性の概念である。すべての実在性が自我へと措定されているということは、すべての活動性が自我へと措定されているということである。そして逆に自我におけるすべてが実在性であるということは、自我はもっぱら活動的であると

いうことである。」<sup>(2)</sup>

「自己<sup>・</sup>措<sup>・</sup>定と存在とは、一にして同じものであるが、自己<sup>・</sup>措<sup>・</sup>定と活動<sup>・</sup>性一般の概念も同一である。したがって、あらゆる実在は活動<sup>・</sup>的であり、すべて活動<sup>・</sup>するものは、実在である。活動は、積極<sup>・</sup>的な実在であり、(単に相対<sup>・</sup>的な実在と対立した)絶対<sup>・</sup>的な実在である。」<sup>(3)</sup>

これに対し、自我がその本来の純粹な活動<sup>・</sup>性を阻止され、全き実在性を制約されるのは、自我の措定作用を阻む非我の限定があるからであった。言い換えれば、自我は非我との制約し制約される相互の關係に措定されている限りでは、その十全の活動<sup>・</sup>性、つまり実在性を制限されていた。フィヒテでは一般に客観は主観の活動を制限する対象と考えられており、客観が主観にとって、「対立したもの」という規定をもつ限りは、これとの關係におかれた自我は、有限でしかありえなかった。端的に言って、対象に關係する自我は客観<sup>・</sup>的であり、客観<sup>・</sup>的である限り、自我は有限なのである。そしてここに、自我が「理論<sup>・</sup>的自我」である限りでの限界があった。

それでは、『全知識学の基礎』の第三部「実践<sup>・</sup>的なものの学としての知識学」に至って、それまでの有限な關係に拘束されていた理論<sup>・</sup>的自我の限界を超えるものとして、何が要望されたのであろうか。思想の動きの根底にあるのは、「すべてが自我と一致し、あらゆる実在性が自我によって端的に措定されねばならないとする実践<sup>・</sup>的理性の要求」<sup>(4)</sup>である。この「自我によって端的に措定されるべきあらゆる実在性」と言われているものは、さきに指摘した制約されない自我の活動の全体のことであって、それはそこにおいて自我と対立するものが何もない、したがってまたその活動<sup>・</sup>性がいささかも疎外されない、自我の「無限<sup>・</sup>性」のことだといってもよい。したがって、いま、この「実践<sup>・</sup>的自我」で新たに求められているのは、「自我の活動との相互作用にある非我の活動に依存している現実の世界ではなく、自我によってあらゆる実在性が端的に措定されるであろう時の世界、したがってもしばら自我によってのみ措定され、非我によってはまったく措定されない、理念の世界」<sup>(5)</sup>でなければならない。フィヒテにとって「絶対<sup>・</sup>的なもの」とは、こうした「自我の端的な活動<sup>・</sup>性＝無制約<sup>・</sup>な実在性」という最高の理念を意味する。それでは、この理念と実践<sup>・</sup>的自我との關係は、どのようなものと考えられているのであろうか。

理念は絶対<sup>・</sup>的な自我のあり方を示す最高の客観として定立されるが、これはもちろん經驗的な所与として主観に与えられうる対象ではない。それは、自我が自己との完全な同一性を求めて無限の彼方で結ぶ自己の究極の統一の像にほかならない。したがってこの理念の世界、つまり自我の絶対<sup>・</sup>的な活動<sup>・</sup>性にして全き実在性の世界は、無制約<sup>・</sup>的な実在性（無限<sup>・</sup>性）の世界であって、この理念を唯一真に關与すべき客観としてそこへと志向する自我は、「無限へと向かう自我」(ins Unendliche gehendes Ich)と呼んでよい。すなわち、「無限へと向かう自我」は絶対<sup>・</sup>的な活動<sup>・</sup>性＝真実在という理念を志向し、この理念に対象として關係することによってはじめて、「客観<sup>・</sup>的」である自我なのである。理論<sup>・</sup>的自我では、対象に關係する自我は客観<sup>・</sup>的であるが、客観<sup>・</sup>的である限

り自我は有限なのであった。これに対し、この実践的自我においては、「客観的」(objektiv)であり、なおかつ「無限的」(unendlich)であることは、必ずしも矛盾することとは考えられていない。むしろ、理念を唯一の対象として無限性へと向かう自我は、真に客観的であると言ってよいであろう。

「無限な活動自身は努力として対象と関係しており、ゆえにその限りで、自ら客観的である活動である。」<sup>(6)</sup>

「自我の無限な活動は、その有限な活動とは違った意味で、客観的である。」<sup>(7)</sup>

それでは、実践的自我の理念である無制約的な実在性（無限性）は、それを求める「努力」を通して、そのものとして存在するものになると考えることができるであろうか。

## 18. 理念の限定あるいは有限化について

フィヒテにとって、現実中存在するものは、常に必ず、「規定されたもの」として「有限なもの」でなければならないが、それが規定されるのは、何よりもまず「主観」に対して規定されるのである。つまり、いかなる客観も必ず意識に対して与えられ、経験の対象として規定されるのでなければならない。なぜならかれにとって、そもそも主観との関係に措定されてあるのではないもの、その関係を超えてあるものは、たとえ存在すると言われても、知識学の領域を超えた「超絶的」(transzendent)なものにほかならず、自我に内在的で「先験的」(transzedental)な知の領域には入らないと考えられているからである。

とするならば、自我の究極のイデーとして求められた無制約的な実在性は、それが現実中存在するものとして知られるためには、何よりも意識され、意識に対して措定されるのでなければならない。言い換えれば、理念となった絶対的自我の無限性は、今度はその無規定性を、意識という経験的な主観との関係の中で反省され、限定されて、有限なものとならねばならないのである。

「あらゆる規定性の外にある無規定な努力一般は無限ではあるが、そのものとしては意識されないし、意識されうることもない。なぜなら意識は反省によってのみ可能であり、反省は規定によってのみ可能であるからである。しかしこの無規定な努力が反省されると、それは必然的に有限となる。」<sup>(8)</sup>

ここまで見てきて、われわれは、実践的自我の動きには背馳する二つのベクトルがあることに容易に気づくであろう。一つは、自我の観念性（自己措定の作用）と実在性との最高の総合を理念として、「無限性へと向かう自我」の方向であり、あとの一つは、理念である無制約的な実在性の無規定性を「限定する自我」の有限化の方向である。フィヒテの言葉を用いれば、前者は実践的自我における「遠心的」(zentrifugal)な方向であり、後者は「向心的」(zentripetal)な方向と

いうことになる。つまり、無限性を有限化すべく自己自身へ向かう自我が主観的な「反省する」自我であるのに対し、無限へと向かう自我は客観的な「反省される」自我になるということである。フィヒテの語るところを聞いてみよう。

「かくしてわれわれは、二つの観点で自我をもつ。一つは、反省するもの(reflektierend)である限りでの自我であり、その限りでその活動の方向は、向心的である。また一つは、反省されるもの(reflektiert)である限りでの自我であり、その限りでその活動の方向は、遠心的であり、しかも無限へと向けて遠心的である。自我は実在性として措定されているが、実在性を持つかどうかは反省されることによって、自我は必然的に或物(etwas)として、量として措定される。しかし自我はあらゆる実在性として措定されているのであるから、自我は必然的に無限の量として、無限性を充足する量として措定される。」<sup>(9)</sup>

以上述べてきた所からも分るように、フィヒテにとって「絶対的な自我」とは、何よりもまず、絶対的な活動性＝無限の実在性という理念的に把えられた自我のことであった。しかし、その絶対的な自我はそのものとして存在するのではなく、存在するものとして知られるには、それは意識の対象として措定され有限なものとならざるを得ない。ここに現れているのは、方向を異にした自我の二つの活動性である。「反省するものである限りでの向心的な」自我の活動と、「反省されるものである限りでの、しかも無限へと向けて遠心的である」自我の活動と。前者の自我を、「主観的自我」と呼び、後者の自我を「客観的自我」と呼んでもよいであろう。

このことを踏まえて、われわれはフィヒテが展開した実践的自我と理念との関係に関し、次のことに充分留意しなければならない。それは、理念としての無限性を現実へと限定を通して媒介する場合、それを限定する働きを担っているのが、反省する主観的自我であるということである。——最初求められていたのは、理論的自我の限界を超えるものとしての活動性と実在性との「絶対的な同一性」であって、そのゆえにこそこれを唯一の真の対象を見定めて「無限へと向かう自我」の志向性が見られたのである。ところがいま、無限へと向かうこの客観的自我の無規定性（無限性）を有限化すべく、自ら絶対的な活動性（理念）の立場に立って限定する主観的自我の方向が露わになってくる。すなわち、反省するもの（主観）は反省されるもの（客観）よりも、より高次であるとする悟性の観点から、客観的自我の無限性を限定する主体が主観的自我となって現れてくるのである。

してみれば、この規定するものと規定されるものという関係の中で、「絶対的なもの」を現実へと措定しようとしたことは、フィヒテにおける実践的自我の「実在論的」(realistisch)な側面を示すものだと言ってよいかもしれない。しかし同時に、限定された無限性は、あらゆる実在性であるという自我の本来の規定に矛盾するのである。したがってこの有限なものは再びその有限性を脱して無限なものにならねばならなくなるが、これは自我における有限性と無限性との悪しき循環にほかならないであろう。

## 19. ヘーゲルによるフィヒテ批判の要約

フィヒテ哲学で展開された以上のような実践的自我における自我規定に関して、次にそれではヘーゲルがそれにどのような批判を加えているかを見てみよう。それは、簡にして要を得た、極めて鋭利な批判となっているように思える。

「努力の内に含まれているものをさらにどれほど展開しても、また展開から生じてくる諸々の対立をいかに総合してみても、その中には非同一性という原理が含まれている。体系のこれ以上の展開はまったく、徹底した反省に属していて、思弁はこれにはまったく関与していない。絶対的同一性は、対立するものの形式の中でのみ、すなわち理念として存在しているにすぎない。……対立の中で自己を措定する自我、あるいは自己自身を制限する自我と、無限へと向かう自我とは、前者は主観的自我、後者は客観的自我という名のもとで、次のように結ばれて現れてくる。すなわち主観的自我の自己自身を規定する働きは、客観的自我の理念、つまり絶対的な自己活動、無限性という理念に従う規定の働きであり、客観的な自我、つまり絶対的な自己活動の方は、この理念に従い主観的自我によって規定される。……主観的で観念的な自我は、客観的自我からいわば自らの理念の素材を、すなわち絶対的な自己活動性、無規定性を得ており、客観的な、無限へと向かう実在的な自我は、主観的自我によって制限される。しかし、主観的自我は無限性という理念に従って規定するために、制限を再び止揚し、自らの無限性の中では客観的自我をなるほど有限なものにするが、しかし同時に自らの有限性の中では客観的自我を無限的なものにする。この相互規定には、有限性と無限性との対立、実在的な規定性と観念的な無規定性との対立が残存している。すなわち、観念性と実在性とは統一されていないのである。」<sup>(10)</sup>

見られるように、以上のような実践的自我概念に対するヘーゲルの批判は、極めて正確であって、いささかも間然する所がない。そしてそれは、フィヒテに一切の反駁の余地を与え得ないまでに決定的とも言えるものであった。事実、フィヒテはこの批判に対しては、少しの論駁もなし得なかったし、以後、かれに幾多の再修正が見られるにせよ、自我の同一性を主観的なものと見るその立場は、基本的には何ら変っていない。つまるところ、フィヒテの自我哲学では、「絶対的」であることと「実践的」であることとは、同じ一つの事柄ではなかったのである。自我がそもそも実践的であるのは、それが絶対的ではないからであり、その限りで自我はどこまでも絶対的であらねばならないのである。こうした実践的当為の絶対的要求そのものが、ヘーゲルの指摘するように、直観と理念との根源的な対立から発現しており、そこには観念性と実在性との真の同一性(生きた無限性)が欠如している。そして真の実在性の根底をなすこの同一性の欠如から、「努力」にせよ、「当為」にせよ、あるいはまた「絶対的要請」にせよ、フィヒテ哲学における実践的な概念のすべては生まれていたと言えるであろう。われわれの見るところ、こうしたヘーゲルの

フィヒテ批判というものは、フィヒテ哲学自体に内在する矛盾を抉り出した、極めて正当な批判であったと思えるのである。

## 20. 「ヘーゲルのフィヒテ解釈はあべこべ」か

しかしながら、ヘーゲルによるフィヒテ批判のあり方に対しては、その正当性を認めない解釈といったものも、実はないわけではない。例えば、われわれがこれまでも、フィヒテの実践哲学の中心的思想（絶対的共同体論）をヘーゲル自身の思想の核心とあべこべに取り違えて解釈しているとして批判を加えてきた加藤尚武氏は、ヘーゲルのフィヒテ批判を、実はフィヒテの自我規定に対するヘーゲルの「あべこべ」の理解に基づいてなされたものだとする独自の解釈でもって批判して次のように述べている。

『彼（ヘーゲル）はフィヒテの主張を要約すべく、「対立の内に自己を定立する自我、すなわち自己自身を規定する自我」を「主観的自我」と呼び、「無限なるものの内に進んで行く自我」を「客観的自我」と呼んで、「両者の規定は交互規定である」という。ところが、これでは主客の規定がフィヒテとあべこべである。そして「主観的観念的自我は、客観的自我によって、その理念の質料ともいうべき、絶対的自己活動性、無規定性を得る。客観的な無限なものに進んで行く実在的自我は、主観的自我によって限定される」とフィヒテを要約する。』<sup>(11)</sup>

「論敵フィヒテのみならず盟友シェリングとも（ヘーゲルは）あべこべである。当時のヘーゲルの思想と最も密接な関係にあるシェリングの『先験的観念論の体系』でも、絶対的能動性—観念的主観的、相対的受動性—実在的客観的という用語の並行関係は動かない。』<sup>(12)</sup>

「フィヒテの論点を要約したつもりで、それをあべこべにとったヘーゲルの自我規定は、経験的自我と先験的自我とを根源的同一性という関係の内部において把える彼自身の考え方を示している。それゆえ、彼のフィヒテ批判は、このあべこべの規定をそのままにして、別の論点からなされる。』<sup>(13)</sup>

何ということだろう。こともあろうに、フィヒテ哲学の根幹をなす「自我」の概念を、ヘーゲルは「あべこべ」に解釈・要約したままに、それと気付くこともなくフィヒテを批判したつもりになっていたのか。これは、重大な指摘である。事実そうであったとすれば、批判する相手の思想の核心を取り損ねて見当ちがいの批判に挺身している哲学者ヘーゲルの姿は、ドンキホーテさながらに、何ともこっけいであるばかりか、憫みを催すに充分であって、そうした「あべこべの規定をそのままにしてなされたヘーゲルのフィヒテ批判」といったものは、たといえかなる「別の論点からなされ」たにもせよ、その批判の正当性・有効性を云々するどころの話ではない。な

んと、そういうことであったのか。

それにしても、加藤氏が幾度となく主張しているように、ヘーゲルがフィヒテの自我規定を「あべこべ」に要約したままに、批判したつもりになっていたというのは、いったい、これは本当のことなのだろうか。氏はまず、ヘーゲルがフィヒテの自我規定を転倒して要約したのだと推定する第一の論拠として、ヘーゲルは「自己自身を規定する自我」を「主観的自我」と呼び、「無限へと進んでいく自我」を「客観的自我」と呼んだことをとり上げ、「ところが、これでは主客の規定がフィヒテとあべこべである」と断定している。これは、何のことだろうか。いったいフィヒテが「自己自身を規定する自我」を「客観的自我」と呼び、「無限へと進んでいく自我」を「主観的自我」と呼んでいたとでも言うのであろうか。何とも不思議な解釈である。

ついで氏は、すでにわれわれも引用した、フィヒテの実践的自我に対するヘーゲルの要約を指して、「フィヒテの論点を要約したつもりで、それをあべこべにとったヘーゲルの自我規定」と述べて、批判しているが、そのヘーゲルの手になる「要約」の箇所をもう一度、引用してみよう。

「主観的で観念的な自我は、客観的自我からいわば自らの理念の素材を、すなわち、絶対的な自己活動性、無規定性を得ており、客観的な、無限へと向かう実在的な自我は、主観的自我によって制限される。」

このヘーゲルの要約のどこが、「あべこべ」なのであろうか。フィヒテの「実践的自我」では、理念に従って自らを絶対的な活動性の地位へと定立した自我は主観的自我となつて、「規定するもの」になり、同時にそのことによって「規定されるもの」となつた客観的自我は、主観的自我との「因果関係」へと措定されるのではなかったか。

さらに氏は、「論敵フィヒテのみならず盟友シェリングともあべこべである」として、「絶対的能動性—観念的主観的、相対的受動性—実在的客観的という用語の並行関係は動かない」と言っているが、これも可笑しい。この互いに相容れない概念の図式のセットによって、シェリングまでもがフィヒテと同列に、ヘーゲルに対置させられているが、これはしかし、「絶対的同一性」の思弁的認識においてこそヘーゲルと思想の原理を共有していた当時のシェリングに対してはもちろん、今問題にしているフィヒテに対しても、正当な見方であるとは言えまい。なぜなら、こうした概念の構図があてはまるのは、フィヒテではかれの『知識学』での「理論的自我」の領域においてだけだからである。総じて、「動かぬ平行関係」へと固定された概念の図式からフィヒテの思想を見ている限りでは、対立し合う二つの概念の「総合」に払ったフィヒテの苦心も、その総合をこそ達成せんとしたかれの思惟の必然性も、ましてその「絶対的综合」ゆえにそのまま絶対の対立へと分裂してゆくフィヒテ哲学の矛盾に満ちた思惟の動勢も、見えてくることはあるまい。否、逆にこうした概念の固定した「並行関係」からフィヒテ哲学の全体を割り切ろうとすることは、それ自体、理論的知の限界を超えるべく提起された「実践的自我」の課題とその展開への総合的な視点が欠落していることを示すばかりか、フィヒテ哲学における理論的知と実践的知の二つの自我の基本的な区別の認識すら欠如していることを明示するものであろう。



## 21. フィヒテ哲学における悟性と総合

もう一度、振り返ってみよう。フィヒテの哲学には、自我の活動性＝実在性とする理性的な認識、すなわちすべて活動するものを真の実在と考え、真の実在を働くものとする認識が、かれの思想の内奥に魂として存在していたことは否定できないのである。ヘーゲルがこれをフィヒテ哲学に内在する「純粹に思弁的な精神」と呼んで最も高く評価したことは、すべに述べたとおりである。けれども、かれの哲学には、思弁よりは反省的悟性が圧倒的に優勢であった。それは、観念的一実在的、主観的一客観的、能動的―受動的というように二つの相対立する概念への分離・対比を本質とする思惟である。しかし、言うまでもなくフィヒテはこうした固定した概念の関係で立ち停ったのでない。かれは、悟性的思惟が次々と産み出す概念の限りない対立に巻き込まれて、いかにしてこれを総合へもたらしめべきかに、ひたすら腐心しているのである。『全知識の基礎』は、まさにそうしたフィヒテの悪戦苦闘のドキュメントだといってよい。

以上のことから、フィヒテ哲学の特徴を、簡単に次のようにまとめることができよう。

- (一) 自我の純粹な自己措定の行為と存在とが根源的に同一であると見る「思弁」の萌芽
- (二) 自我の行為を直観の多様からの抽象に成り立つ純粹に観念的な同一性と見て、非我との相互限定の関係にある限り、有限でしかないとする理論的自我の立場
- (三) 自我の絶對的な活動＝真実在の無限性という理念的な総合を求めつつも、自ら絶對的自我の理念に従って無限性を限定する主体へと変貌する「絶對的主観性」(absolute Subjektivität)の立場と、現実性へと限定される無規定性が蒙る徹底した被規定化、つまり「絶對的有限性」(absolute Endlichkeit)の立場との矛盾する事態

このように見れば、フィヒテの哲学は、悟性的思惟が産み出す主客の必然的な対立関係を理性的に「統一」しようと試みながら、再度、「関係の現実」へと戻らざるを得なかった悟性の哲学であったといつてよいであろう。それはまた、いわゆる意識を超えた「独断論」に陥るまいとして、結局、主客の関係の現実以上に超えて見ることのできなかった哲学であった。

とまれ、本来の「哲学」の原理を「絶對的同一性―思弁―理性」とつながる一線ではっきりと見据えていたこの時期のヘーゲルにとって、フィヒテの哲学は主にその「反省―相対的同一性―悟性」の立場からなされた「総合」の哲学であったのであり、そして何よりもそのいわゆる「絶對的な総合」のあり方こそが批判されなければならなかったのである。

したがって、ここではっきりと言っておきたいが、われわれはヘーゲルがフィヒテ哲学を解釈する際に、その最も根本的な自我規定を「あべこべ」に要約した上でフィヒテを批判したつもりになっていたとは、少しも考えないのである。それとはまったく逆に、かれのフィヒテ批判は、フィヒテ哲学の展開に則して、正確かつ深く洞察的なのである。すでに述べたように、かれは一方ではフィヒテの哲学に内在している「思弁的なもの」の認識を高く評価しながらも、その体系の進展とともにますます優勢になっていった対立と総合をめぐる矛盾の根本理由を反省的悟性の

内に見て批判したのである。だから、主客のあるいは観念性と実在性の総合の定立がそのまま反定立へと転換する反省の論理の否定的な本性への洞察と、その逆転する概念の過程を看過するならば、フィヒテ哲学が辿った悟性的思惟の破綻の軌跡を浮かび上がらせるという、ヘーゲルの行った最も大切な批判の要点が見えてこないであろう。一つの思想を批評するには、一見わかりやすい概念の対比によってこれを論断し、捌くことが有効なのではない。概念の展開とともに形をとってくるものをさらにその根源へと遡って追尋し、そこに働いている思惟の動勢を論理の事態として認識することが、大切なのである。

## 註

### 引用略号

GW. Grundlage der gesamtlem Wissenschaftlehre. hrsg. v. W.G. Jacobs, Hamburg. 1970

DF. Differenz des Fichteschen und Schellingschen System der Philosophie  
(Bd.2 der Theorie-Werkausgabe, Suhrkamp)

『形成』. 『ヘーゲル哲学の形成と原理』加藤尚武著(未来社, 東京, 1980)

- 1) GW.S.173
- 2) GW.S. 60
- 3) GW.S. 55
- 4) GW.S.181
- 5) GW.S.186
- 6) GW.S.185
- 7) GW.S.185
- 8) GW.S.187
- 9) GW.S.191
- 10) DF.S.71~72
- 11) 『形成』. 112~113
- 12) ibid.S.113
- 13) ibid.S.114

(平成4年10月30日受理)